

(別紙2)

## 論文審査の結果の要旨

氏名 勝浦 令子

勝浦令子氏の論文『日本古代の僧尼と社会』は、七世紀から十二世紀にかけての日本古代の社会における僧尼の存在形態を通して、国家・宮廷・民衆などによる仏教受容の構造的な特質、そしてその歴史的展開を明らかにした研究成果である。

研究の特徴としては、僧尼のあり方をめぐって、東アジア諸国との比較やジェンダーの視点からの実態分析を行なった点、寺ではなく「家」「宮」などで僧尼の果たした機能、称徳女帝の王権と仏教との関係の特質、そして平城京内外の民衆による仏教受容の特質などについて深く掘り下げた点にあり、新しい出土文字資料や従来あまり注目されなかった史料を掘り起こしたことも評価できる。

I「日本古代の僧と尼」では、国家による僧・尼の位置づけの差を比較検討し、はじめは尼にも与えられ得た僧位が、男性用の僧位（「大法師位」）の成立を受けて称徳天皇時代に尼用の称号（「大尼」）ができるものの、称徳没後に尼位が衰退する歴史的展開などを明らかにする。II「『家』と僧尼」では、寺ではなく宮や家において僧・尼が果たした機能や存在形態を明らかにするとともに、8世紀の内裏仏事では重視されていた尼が、称徳没後に排除されていった過程などを明快に指摘する。III「東アジアにおける尼の比較研究」では、中国・朝鮮半島諸国との比較から、8世紀まで低くなかった日本の尼の地位が9世紀以降低下していく過程と、その背景などを明らかにする。IV「尼天皇と仏教」では、尼天皇として「出家者による統治」を構想した称徳（孝謙）天皇における王権と仏教の結びつきの特徴を、座右経典の内容に立ち入って分析し浮き彫りにする。V「民間の知識活動と僧尼」では、行基集団における民衆の構成の変容とその特質などを明らかにする。

従来深く検討されなかった尼の存在形態の実像を明らかにする個々の論点は新鮮であり、堅実な実証的手法や、女性の立場に執着し過ぎない客観的立場とともに、説得力ある

論旨展開になっているといえよう。さらに、幅広い角度から尼の存在形態の歴史的展開についての全体的な見通しを提示していることは、意欲的で有益な研究成果と評価し得る。

以上、本論文は、日本古代の社会における僧尼とくに尼の存在形態、王権、家・宮や民衆の仏教受容などについて、その特質を指摘するとともに歴史的展望を提示している。とくに、日本古代の尼の存在形態を東アジア諸国との比較やジェンダーの視点から浮き彫りにしたこと、寺以外の家・宮における僧尼の存在形態を解明したことや、称徳天皇時代の王権による仏教受容の特質と政治との関係などについて明快な論旨を展開したことは、研究史上意義のあることといえよう。対象が広範囲に及ぶことから、なお光明皇后の仏教への論及、称徳天皇など女帝時代の仏教の特殊性への配慮など、さらに論理的な深化・展開が望まれる部分もあるものの、日本古代の僧尼のあり方の実像とその歴史的展開に迫る上で独自の達成を果たした点で、本論文は今後の日本古代史研究に有益な基礎をもたらしたものと評価できる。

したがって審査委員会は、本論文が博士（文学）にふさわしい研究であると判断する。